

大学院に期待するもの—大学院開設を記念して—

奈良県立医科大学医学部看護学科

飯田順三

Expectations for graduate school

Junzo IIDA

Faculty of Nursing, School of Medicine, Nara Medical University

1. はじめに

漸く平成24年度より本学看護学科に大学院が設置されることとなった。正式には「奈良県立医科大学大学院看護学研究科修士課程 看護学専攻」であり、学位は修士(看護学)である。一学年の入学定員は看護学コース5名、助産学実践コース5名で合計10名である。奈良県で看護学研究科修士課程の大学院は初めてであり、今後本学大学院が奈良県における看護の質の向上に貢献するこがと大いに期待される。

そこで大学院開設にあたり、開設までの経緯や我々はどのような大学院をめざし、大学院に何を期待するのかについて、これまで看護学科内のワーキンググループで検討してきた内容を中心に私見を混じえながら述べてみたい。将来大学院を發展させていくうえで、このような記録を紀要に留めておくことも何かの役に立つかもしれないと思いここに記すことにした。

2. 大学院設置の経緯

この20年間に看護学教育には大きな変革のうねりが起こっており、現在もその真っ只中にある。看護系大学は平成3年度には11校であったが、平成23年度には200校となった。看護師国家試験合格者に占める学士課程修了者の割合は2割を超えるに至っている。このことはその昔看護学教育が医学教育の付属物的扱いであった頃と全く異なり、完全に独立して医学教育と並列した立場にあることを物語っている。そして医療の高度化と同様に、看護師においても高い臨床実践能力が求

められるようになった。また医療の高度専門化により医師は疾患の治療は行うが人としての患者を診ることが減り、その役割が看護側に任されるようになってきている。さらにチーム医療が叫ばれるようになり、チーム医療において看護師が中心的役割を担う必要性がでてきた。このように看護師としての高度な知識と技術、患者を一人の人間としてみる際に必要な心理学的、社会学的視点、さらに他職種との協働における教養やコミュニケーション能力など看護学教育においてさまざまな知識と技術の修得が必要になってきた。このことから大学における看護学教育の重要性が増してきている。

また看護学の発展とともに看護学の学術研究が盛んに行われるようになってきている。その学術研究の拠点となるのが大学院である。平成8年度には修士課程が8つであったが、平成22年度には修士課程数127、博士課程数61と急激に増加している。

本学も大学院の必要性を感じ、平成19年度に医学科修士課程(医科学専攻)とともに申請を予定した。しかしその際は研究指導教員数の不足にて申請を取り下げることとなった。その後大学における教員の充実を図り、再び吉岡学長の指導のもとで大学院の申請を行うこととした。平成24年度の開設を目標に平成22年2月より大学院検討部会を看護学科に設置して検討を開始した。まず問題になったのは助産師課程と保健師課程を大学院で行うべきかということであった。学部でのカリキュラムの過密さから助産師課程は大学院で

行うべきであるという結論に達した。保健師課程に関してはこの時点で大学院で養成しているところは国内ではきわめて少ないために、学部で選択制とすることに決まった。次いで研究指導教員数の確保については、新教授選任にあたり、大学院設置を明記してその任にふさわしい人選を行うこととした。さらに現任の教員に業績を上げるように論文数を増やし、英語論文を書くように努力してもらった。また施設の整備について検討し、5階と6階の倉庫になっている部屋を改装し大学院研究室や講義室にすることにした。

当初保健看護学専攻とし、助産師養成コース5名と保健看護学コース5名を定員とすることにした。これは医学科からの看護師のみではなくコメディカルの人たちが入学しやすいようにすべきとの強い要請を入れて保健看護学としたのであった。漸く大学院設置の骨子ができたために平成23年1月に文部科学省に事前相談に行った。しかしここではかなり厳しい意見をもらった。設置の趣旨があいまいである、保健看護学として何がしたいのか、学部から院になるために学部教育の何を活かして進めるのか、総花的でわかりにくい、もっと特性を明らかにすべきである、どういう人材を育てたいのかよくわからないなど指摘を受け、この時点にしては準備が遅すぎる、このままでは間に合わないのではないかと厳しく意見され、これは大変なことになったと思った。学長からは大学院設置は至上命題であると言われており、医学部長も紀要の特別寄稿に大学院設置が喫緊の課題であると書かれているのを思い出した。

文部科学省の意見を持ち帰り、本学の大学院の特性について議論を行った。そして助産師養成と地域医療への貢献を2本柱として設置の趣旨等を書きなおすことにした。また保健看護学コースを基盤保健看護学分野と実践保健看護学分野に分け、基盤保健看護学分野に健康科学領域と基礎看護学領域を置き、実践保健看護学分野に成人看護学領域、高齢者看護学領域、小児看護学領域、女性健康・助産学領域、精神看護学領域、地域看護学領域の6領域を置くこととした。

5月の文部科学省の事前相談でも幾つかの厳しい指摘を受けたが、同時に医学科の教授でも専任

教員として認められることがあるという重要なアドバイスを受けた。そこで学長に相談し、すでに助産学で特論の講義をしてもらう予定の小林浩教授（産婦人科学）と高橋幸博教授（周産期母子医療センター）に加えて吉川正英教授（病原体・感染防御医学）に研究指導教員になっていただくことにした。申請書類の提出まで約2週間しかなく、3人の先生方には大変なご苦勞をおかけしてご迷惑をおかけした。しかしそのおかげで十分な数の研究指導教員がそろそろことになった。5月末に正式に申請書類を提出した後、8月に文部科学省より審査意見の伝達が行われた。そこでは先に述べたように研究指導教員数は十分に満たす結果となったが、保健看護学専攻にクレームがついた。学部に保健となるような学科が存在せず、それに相当する教官もいないのに大学院で保健をつけることには無理があった。そこで大学院設置準備委員会で医学科の先生に了解していただき、保健看護学から看護学に変更した。

9月に文部科学省の質問および指摘事項に対する回答書と補正申請書を提出し、漸く10月末に認可された。それなりに苦勞したので認可の決定を聞いたときには本当にほっとした。設置にご尽力いただいた先生方、職員、特に学務課職員の皆様には心から感謝している。

3. 本学看護学科大学院の特性

先述したように看護学科大学院は急増しており、魅力ある大学院でないと学生の質と数を確保することは困難である。文部科学省でも平成23年3月の大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会の最終報告において、大学院における人材養成においては、看護学の学術研究を通じて社会に貢献できる研究者や教育者の養成、学士課程では養成困難な、特定領域の高度専門職業人や保健、医療、福祉等に携わる専門職の協働においてマネジメント能力を発揮できる人材の養成が挙げられている。

本学の特性は第一に助産師養成を大学院で行うことである。これは従来の学部での助産師養成では高度化する知識と技術を十分に習得できず、実践能力に不安な面があることが挙げられる。特に

本学では附属病院に正常産は助産師が中心となって継続的に関わり、リスクのある場合は産科医が医療対応するメディカルバースセンターが設置された。ここではまさに助産師の高度な実践能力が求められる。またここでは母と子および家族に対するケアの研究や他分野と協働しながら母子保健に貢献できる研究者・実践者の育成を目指すこととした。

第二に地域医療における貢献が考えられる。奈良県は中山間地域や山間地域が多く、「過疎地域自立促進特別措置法」の指定を受けた市町村が多く存在している。高齢化率も中山間地域では30%台、山間地域では40%を超えている現状にある。また中山間地域や山間地域では無医あるいは無医地区に準ずる地区が多くを占め、保健医療供給体制が乏しいのが現状である。この奈良県の地域特性を鑑み、地域に居住する住民の疾病予防や健康維持・増進を担う高度な実践能力を有する保健師・看護師の育成を目指す。そしてさまざまな職種との協働が必要になってくるために、保健、医療、福祉等に携わる専門職の協働においてマネジメント能力を発揮できる保健師・看護師の育成を目指すこととした。このために共通科目に地域医療学を設置し、本学医学科の地域医療学講座の松村雅彦教授に講義をお願いすることとした。

この2本柱に加えて、各領域の研究指導教員が各自の研究テーマを中心として専門性を発揮し研究指導することとなる。

4. 大学院に期待すること

本学附属病院の看護師には是非大学院進学を進路選択の一つとして考えてほしい。臨床で疑問に思うこと、明らかにしたいことを研究という方法で解明してほしい。臨床現場での視点を研究に結びつけることが臨床看護のレベルアップにつながることになる。そのことが奈良県の看護力の向上へとつながると期待している。

また大学院が看護学科と附属病院の連携強化につながることも期待している。大学院における教育・研究を通じて交流が深まり、附属病院の看護師が修士課程を卒業後、今度は本学の教員となり附属病院との連携が一層強化されることを期待し

ている。

さらに本学卒業生が本学大学院を卒業し、本学の教員となることで、本学の学生にとって将来のよきモデルとなり、向学心が一層増し、愛校心が強化されることが期待される。つまり大学院の設置によって良き教育者が育成されることが期待される。

5. 今後の課題

本学看護学科大学院は修士課程のみである。将来博士課程の設置が必要となるであろうが、その前に専門看護師養成コースを設置すべきである。附属病院看護師のアンケート調査でも専門看護師養成コースへの進学希望者が最も多かった。附属病院における専門看護師を増やすことで看護レベルの向上を図る必要がある。

しかしまだ大学院は緒についたばかりである。よりよい実践者としての看護職者や研究者や教育者を育てるために、我々教員が見本となるべき教育者であり研究者となる必要がある。学生に対しても、研究においても常に誠実であるべきであり、人としてあるべき姿が求められる。校舎内に掲げられている「恕」の精神を大事にしたい。